

J.J.ルソー『学問芸術論』前川貞次郎訳、岩波文庫、1750=1968

(——はルソーの積極的な主張)

【序文】

- ・精緻な形而上学 ←→ 人類の幸福にかかわる、あの真理の一つ
- ・才人たちや当世流行のひとつと(今日の無信仰者や哲学者)
- ・公衆の賞讃 ←→ いく人かの賢者の賞讃
- ・テーマ: 学問や芸術の復興は、習俗を純化するのに役だったのでしょうか
それとも、習俗を腐敗させるのに役だったのでしょうか
- ・ルソーの立場: なにも知らないが、それでもみずから頼むところがある誠実な人間にふさわしい立場、生来の明知にしたがって真理の側を支持
- ・博識であること ←→ 誠実というもの

【第一部】

- ・お互いに讚美しあうにふさわしい著作によって、お互いに気に入ろうとする欲望を刺激して、人間を一そう社会的なものにする
- ・学問、文学、芸術は、政府や法律ほど専制的ではありませんが、おそらく一そう強力に、人間を縛っている鉄鎖を花輪でかざり、人生の目的と思われる人間の生まれながらの自由の感情をおしこらし、人間に隷属状態を好ませるようにし、いわゆる文化人を作りあげました
- ・なに一つ徳をもたないのに、あらゆる徳があるかのような見せかけ
- ・衣装のゆたかさ、衣装のみやびやかさ ←→ 肉体の力強さ
善行の士は裸で戦うのを好む力士です
- ・芸術がわれわれのもったいぶった態度を作りあげ、飾った言葉で話すことをわれわれの情念に教えるまでは、われわれの習俗は粗野ではありましたが、自然なものでした。そして態度の相違が、一目で性格の相違を示していました。人間の性質が根本的に今日よりよかったわけではありませんが、ひとつとはお互いをたやすく見抜くことができたので、安心していたのです。
- ・ひとをよろこばす術を道徳律にしてしまった
- ・つまらなくて偽りの画一さ、精神が同一の鑄型に投げこまれる
- ・たえずお上品さが強要され、礼儀作法が守られます
- ・慣習にしたがう
- ・疑惑、猜疑、恐怖、冷淡、遠慮、憎悪、裏切りがつねに隠されている
←→ 自己本来の才能、ありのままの姿
- ・われわれの学問と芸術が完成に近づくにつれて、われわれの魂は腐敗したのです。これと同じ現象は、あらゆる時代、あらゆる場所においてみられます。
(エジプト、ギリシア、ローマ、コンスタンティノープル、中国)
←→ 初期のペルシア人、スキタイ人、ゲルマン人、貧しく無知な時代のローマ人、
(アメリカ先住民): 素朴さ、無邪気さ、徳、勇氣、誠実さ
- ・アテナイ: 美術から生まれる悪が集まる、上品と風雅さの住みか、雄弁家と哲学者の国となる
珍奇な大理石像、学問・芸術・弁証術・党派
- ・スパルタ: 芸術家と学者を追放、英雄的な行為の思い出、生まれながら有徳、軍事訓練・農業・祖国

【第二部】

- ・学問と芸術が生まれたのは、われわれの悪のせい。
天文学 ← 迷信 雄弁術 ← 野心・憎悪・お世辞・虚偽
幾何学 ← 貪欲 物理学 ← 無益な好奇心 道徳 ← 傲慢さ
芸術 ← 奢侈 法学 ← 不正 歴史 ← 暴君・戦争・陰謀家
- ・さまざまな見解の中で、真理をよく判別するための、われわれの「標識」とは何か。
誰がそれを有効に用いることができるか。
- ・学問が社会に与える第一の害: 時間の浪費
道徳においてと同じように、政治においても、すこしも善をしないことは、大きな悪です。
無用な市民は、すべて有害な人とみなすことができます。
国家の物資をむさぼり食って、何の役にもたないあの無名作家たちや、なすところのない文士どもの群を、どう考えたらよいか。
しかも有害な逆説を武器にして、信仰の基礎をくつがえし、徳を弱めている。
- ・奢侈が国家を輝かしいものになっている ←→ よき習俗が国家の存続に欠かせない
金で買えないものはないが、習俗と市民とは例外である

- ・芸術家というものはすべて、称賛されることを望むものです。
彼の死後ずっと後になって、はじめて讃美されるような、すばらしい作品よりも、自分の存命中に讃美されるような平凡な作品を作るほうを、一そう好むでしょう。
→奢侈の当然の結果である習俗の墮落が、趣味の腐敗をよびおこす
- ・学問を修めること: 勇気を弱め脆弱にする → 戦士としての資質にとって有害
また、道徳的資質にとっても有害
- ・無分別な教育: われわれの精神をかざり、判断力を腐敗させた
青年にあらゆることを教えているが、義務だけは例外のようです
自国語は知らないのに、どこにも使われていない他国語を話す
自分たちがほとんど理解できないような詩を作る
誤謬と真理とを弁別できないのに、特殊な議論によって、他人にそれらを見分けにくいものにする技術を身につける
- ←→ 高邁・公正・節度・人間らしさ・勇気・祖国・神の畏敬
子どもたちが学ぶのは、大人になったときになすべきことであって、大人になって忘れなければならないことではありません
- ・才能の差別と徳の墮落とによって人間の中に導入入れられた有害な不平等 → 悪習の原因
- ・人間に要求されるものは、もはや誠実であるかどうかではなくして、才能があるかないかです。書物が有益であるかどうかでなくして、文章が上手かどうかです。
- ・ルイ 14 世、15 世によるアカデミーの設立——神の模範にならったもの
人間の知識という危険な預かりものと、習俗という神聖な預かりものとをあわせ委ねられており、学会内において、習俗の全き純潔性を維持し、学会のうけいれる会員に習俗の純潔性を要求することに、注意をはらっている。
→ 文人たちを統御するのに役に立つ。文人たちはすべて、アカデミーに入るのを許される名誉を望み、自戒をし、有益な作品や難点のない素行によって、この名誉にふさわしいものになろうと努めるでしょうから。
→ これらの学者の協会が、気持ちよい明知だけでなく、有益な教訓も人類にそそぎこむために献身しているのを見ろという、心ちよい喜びを、人民に与える。
←→ 学者の利益のために設けられた施設: 学問の目的をあやまらせる
- ・自然が弟子にしようとした人: 教師は必要でなかった(ベーコン、デカルト、ニュートン)
学問芸術の研究にふさわしい人は、これらの巨匠のあとを独力でたどり進み、彼らを追いこす力を自覚している人びとだけ。彼らの希望がなにものよりも高いものでなければなりません。
- ・第一流の学者が、国王の宮廷に名誉ある安住の地をみいだすように。
←→ 一方の側に権力が、他方の側に知識と叡智だけが存在するがぎり、学者たちが偉大なことに思いをいたすことは稀であり、君主たちが立派なことを行うのは一そう稀でしょう。
天からそれほど偉大な才能をわかち与えられてもいず、多くの栄誉をうける運命も与えられていないわれわれ凡人は、世にうもれたままにとどまっています。
もし、われわれの幸福を、われわれ自身の中にみいだすことができるなら、これを他人の意見の中にみつけようとして何になるのでしょうか。
徳を知るためには、自分自身の中にかえり、情念を静めて自己の良心の声に耳をかたむける。ここにこそ真の哲学がある。